

れ、疲労困憊の末倒れる者多く、連日牛舎入口に二、三体の屍を見る状態となり、冬は雪中に埋め、融雪後数カ所に合同埋葬した。

また、逃亡者は行方知れず、銃殺されたと聞く。

民主化教育はしばしば行われ、新聞切抜きのレーニン、スターリンの写真を壁に貼り、ソ連への忠誠を示す素振りを見せ、日本人のみの自主管理で事件も起きず、比較的平穏な生活が続いたが、炊事要員には何のかかわりもなかった。私は炊事作業の実績を認められたためか、収容所近郊で映画を見る楽しみもあった。

昭和二十二年四月中旬、ここから貨車に乗せられ、丸一日足らずでナホトカに集結させられ、直ちに乗船。四月十六日舞鶴に上陸し、一年八カ月の抑留生活は終わった。

帰国後、北海道留萌林務署に勤め、昭和五十六年三月に退職。その後札幌市に居を構え、町内会長、老人倶楽部役員等を任された。平成八年六月、妻を亡くし一人身となったが、俱知安在住の長男、札幌在住の嫁いだ長女、次女とも交流し、今後の処世を思案中である。

私のシベリア抑留

神奈川県 大高 武

昭和八年、国府台の騎砲兵大隊に現役入隊し、除隊後は陸軍省に軍属として勤務していた。このようなことから召集はないだろうと思っていたら、昭和十八年五月、召集令状がきた。即刻近衛野砲連隊に入隊した。

数日して部隊は満州宝清に移動、騎兵第三旅団騎砲連隊に配属となった。この部隊は間もなく、南方戦線に移動することになっていたらしい。そのためか、あるとき喀痰検査が行われた。そのとき、氏名を付した私の喀痰容器の蓋はだれかに取り替えられてしまった。取り替えた戦友は保衛者だったのか、私が保護兵とされてしまい、南方への転戦の折、残留させられてしまった。運不運は紙一重とやら、やがてこの部隊は全滅してしまった。だれか知らぬが、彼のために命拾いをした。

昭和十九年、大連の高射砲学校で教育を受け安東の

鉄橋警備隊に転属、高射砲陣地で分隊長として警備に就いていた。朝鮮と国境を接するここ安東は空襲もなく、至極平穏であった。だが全般の戦況は、連合国側の反撃により本土の各都市は焼土と化し、もはや日本の運命は風前の灯であった。このようなことを見逃していなかったか。

ソ連は昭和二十年八月九日未明、中立条約を破って満州、樺太、千島などの北方地域に侵攻してきた。南方戦線に主力を送り出した我が関東軍にはこれを迎え撃つ余力なく、各方面で苦戦を重ねていた。

とうとう運命の日がきた。昭和二十年八月十五日、日本は連合国側に無条件降伏をし、彼らの軍門に下ることになった。日本は負けたのだ。

皆、茫然自失の状態に陥っている。ソ連軍がやって来た。我々と比較にならぬほどの兵器を備えた軍隊だ。勝ち誇った彼らの指示で武器を集め、武装解除を受けた。戦い敗れた軍隊の惨めさと屈辱は生涯忘れることができない。

東京ダモイとのことで奉天へ移動させられた。

奉天には、一般居留民の中から拉致された男の人たちが多勢抑留されていた。この人たちも我々と一緒に貨車に押し込まれ北に向かった。このようなことから東京ダモイとは真っ赤な嘘で、我々をシベリアに拉致するための便法だよと皆で話し合った。一カ月近い窮屈な貨物列車の旅の果て、国境の町黒河に着いた。黒龍江が滔々たうたうと流れている。

対岸にはソ連領ブラゴエシチェンスクの町が見える。土手の下に大きな渡し船が係留されている。船の様子から、相当数の日本兵が拉致され対岸に渡ったものと窺える。ソ連側の私物検査があり、目ぼしい物は皆取り上げられた。取り上げた練り歯磨きをチョコレートと思っただけか、平気で食べている。無知なこと甚だしい。物を数えることも駄目、四列縦隊では絶対に人数が数えられない。五列にされたがまだまだ大変だった。その後、収容所を出て作業に行くとき、特に冬の寒い日など往生したものだ。船で黒龍江を渡り未知の国、ソ連に入った。

ブラゴエシチェンスク郊外の鉄条網と高い板塀に囲

まれた収容所に入れられた。要所要所に望楼が設置され、自動小銃を抱えたソ連兵が夜昼なく我々を見張っている。早速、ビール工場に作業に出された。

また、コルホーズに農作業に狩り出された。ここでは馬鈴薯など適当に持ち帰ることができたので、ひもじさを補うことができた。虱が湧いてきた。滅菌所があったので衣類を滅菌したことにより駆除できた。あるとき、同姓同名の憲兵軍曹と間違われ、しつこく喚問された。その人はスパイとしてソ連側よりマークされていたらしい。やがて疑いも晴れて釈放され、ホッとした。

初冬とはいえどもシベリアは寒い。外の作業は寒く身にこたえる。とうとう風邪を引いてしまい、肺炎になった。早速クイビシェフカの病院に入院させられた。私の入院中に戦友たちは他の収容所に移され、過酷な労働と粗悪な食料事情から大変な苦勞をされたのとこのどった。病も完治し退院させられたが、私も他の収容所に移されてしまった。ここでの作業は、石山に行き石切り作業である。ハンマーを振って石を割ったり、

また、切り出した石をトラックに積み込むなどの作業で、病み上がりの私には相当きつかった。

このようなことから又も肺炎を再発し、再度クイビシェフカの病院に入院させられた。息苦しく、毎日高熱が続いた。女軍医と看護婦が一生懸命に看護してくれた。特に軍医は家族持ちであったが、家に帰らず私たちのために尽くしてくれた。ソ連では当時貴重であったらしいベニシリンも打ってくれた。民族を越えたこの人たちのお陰で私の病もみるみるうちに回復し、退院することできた。苦しい抑留生活を強制されたが、この人たちの善意には今でも感謝の念は去らない。

このとき世話になった一人の看護婦と昭和四十年ごろ、偶然横浜で再会した。彼女は当時、横浜―ナホトカ航路の定期便バイカル号の保健婦として乗り込んでいたのだった。たまたま上陸、買物の途中での再会だった。短い時間だったが一言、過去の礼を述べた。彼女は大変に喜んでくれた。勿論彼女は日本語が達者だった。

退院と同時に又も収容所が変わった。病院の給与に比べ、ここでの給与は遥かに悪い。皆体力が衰え、ま

た、冬ともなれば零下三〇度以上もする寒さだ。寒いというより体が痛い感じだ。

昭和二十二年五月、待ちに待ったダモイの日が来た。喜びいっぱい我々を乗せ列車は東に向かって走った。シベリア本線を五日ほど走ったようだが、列車はナホトカに到着した。日本船が同胞をいっばいに乗せ港を出て行く。「俺たちもすぐ帰れる」と思っていたら、山奥の収容所に入れられてしまった。ソ連側の言うことなど信用できるものではない。材木運搬等の強制労働を強いられ、一年余り足止めを食ってしまった。ナホトカは民主運動が盛んだった。うっかり反対もできない、帰るまではと何事も耐え忍んだ。

昭和二十三年六月中旬、本当に帰れる日がきた。船員さんたちの心のこもった言葉に迎えられる船に乗り込んだ。「恵山丸」という船だった。船はナホトカの港を後に日本海を越え、舞鶴に入港した。昭和二十三年六月十八日だった。生涯忘れ得ぬ感激の日だった。思えば長い長い月日だった。懐かしい我が家に戻れば、出征中生まれた長男も五歳になっていた。

シベリア抑留記

岐阜県 小栗 晴美

在満当時、昭和二十年二月渡満、黒河省孫呉第二三師団通信隊に入隊、昭和二十年八月終戦となる。

シベリア抑留―昭和二十年九月入ソ、ライチハ収容所に入る。以後、その収容所の食事の貧困、極寒、重労働のため、弱栄養失調となり、サビタヤ病院に入院、二月末に退院したが、重労働に不適となり、支所のソホーズの農場に送られた。冬場は軽作業であったが、夏場は干草の草刈に行き、ライチハ以上の重労働であった。それに比較的軽い労働のじゃがいも、きゅうりなどの収穫と組合わせて作業をしたので、この間に若干体力を回復させることができた。

昭和二十四年九月初め帰国命令によりハバロフスク、ナホトカ經由舞鶴に九月二十四日ごろ上陸、帰国した。帰国後、一番困ったことは、赤のレッテルをはられ